

令和5年度 第2回京都市国際交流・多文化共生審議会 摘録

日 時：2024（令和6）年2月16日（金）午前9時30分～

場 所：京都市役所 本庁舎4階 正庁の間

議 題：(1) 京都市国際都市ビジョンの推進及びビジョンを踏まえた本市関連事業について
(2) 今期テーマについて
国際交流に係るテーマ：「市民・民間主体の国際交流の裾野の拡大と担い手の育成」
多文化共生に係るテーマ：「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成」

出席者：＜京都市国際交流・多文化共生審議会委員＞
大熊晋委員、佐野真由子委員、庄秀輝委員、チースレロヴァー・クリスティーナ委員、
浜田麻里委員（座長）、林建志委員、プラー・ポンキワラシン委員、前田哲央委員、
リュウ・ウィトン委員
＜京都市＞
松野 総合企画局政策推進担当局長、西松 国際交流・共生推進室長、
長谷川 同副室長、大久保 共生推進担当課長、檜山 企画調査係長、
大野 共生推進係長、竹原 係員、白敷 係員

次 第：(1) 開会
(2) 議題
(3) 閉会

配付資料：資料1 令和5年度の主な国際交流・多文化共生関連事業について（議題1）
資料2 「京都市国際都市ビジョン」モニタリング指標の状況について（議題1）
資料3 「国際交流に係るテーマ」について（議題2）
資料4 「多文化共生に係るテーマ」について（議題2）

1 議題1

＜浜田座長＞

それでは、事務局から国際都市ビジョンの推進に係る関連事業等の説明をお願いします。

＜事務局＞

〔資料1〕及び〔資料2〕に基づき説明)

また、本日御欠席の孫委員からは、事前に「モニタリング指標の中に直接外国籍市民の声を反映させるものがないことが気になる。負担にならない範囲で、可能なことを検討していただきたい」との意見を頂いている。

事務局としても外国籍市民の声を聴くことの重要性は認識しており、様々な機会を捉えて声を聴けるよう努めていきたい。

＜浜田座長＞

ありがとうございました。それでは、ビジョンの推進に関する今年度の取組状況、それからモニタリング指標の状況に関して御意見、御質問を頂戴したい。

<林委員>

多種多様な取組を具体的に進められていて、その中で字幕表示システムというのを説明いただいたが、すばらしい取組だと思う。以前、外国籍市民と窓口でなかなか意思疎通できないことがあったが、この表示システムが入ったことによって多言語で対応できるようになり非常にありがたい。大体どれぐらいの予算か。補助金はあるのか。

<事務局>

令和5年度の予算については、資料1に記載しているとおりの。

年度当初から予定されていた事業ではなく、企業からの協力の下で試行実施につながったものである。話した言葉がスクリーンに表示される字幕表示システムで、「Cotopat (コトパット)」の機械自体は無償で試行導入された。外国籍市民だけでなく、聴覚障害のある方や高齢者とのコミュニケーションの円滑化も含めて対応している。

<浜田座長>

ありがとうございます。人手がなくてもICTでできる部分と、どうしても人間が対応していかなければならない部分と、両方必要だと思う。

そのほかいかがか。

<庄委員>

カルチャープレナー（文化起業家）に強い関心がある。京都は文化庁を誘致し、文化都市としてますますその強みを発揮していく中で、文化というキーワードで起業をされている方がいるのは、とても勇気づけられる。カルチャープレナーの実践事例をリサーチするとともに、評価事由や社会的インパクトの見える化を図ったというふうにあるが、その取組の内容について可能な範囲で教えていただきたい。

私どもJETROは日本人、京都におられる留学生の方、外国籍の方等が、起業されることに非常に力を入れている。文化を切り口に、カルチャープレナーというところまで動きが拡大してきていることに認識が至っていなかったのも、とても関心を持った。

<事務局>

詳細な事業概要は、改めて提供させていただくが、「カルチャープレナーアワード2023」を開催することで、文化起業家に注目を集め、表彰する機会をつくることで見える化を図ったものである。

<庄委員>

文化をどのようにビジネスに使うまで漕ぎ着けたのか。

<事務局>

京都市が報道発表している資料など、改めて情報提供させていただく。

<浜田座長>

ありがとうございます。後ほど委員全員に情報共有をお願いできればありがたい。
そのほかいかがか。

<プラー委員>

資料2について、市民生活実感調査結果がいずれも下がっているように思う。これに関しては、途中で設問内容が変わったことも影響しているかと思うが、特にその中でも国際都市像3に関する数値が30%台になっている点をどう見ているのか。

<事務局>

この指標については、議題2でこれから議論いただくテーマでも取り上げたいと思っているため、質問いただきありがとうございます。

プラー委員がおっしゃったとおり、この市民生活実感調査についてはそもそも設問が変わっていることもあり、単純に最終数値とビジョン作成時の数値を比較することが難しく、変更後の類似の設問で比べている状況である。

その中で、国際都市像3に関する市民生活実感調査は、まさに今期のテーマで議論いただきたい国際交流の裾野の拡大や、担い手の育成に関わるような調査の内容になっており、「市民・民間主体の国際交流が行われ、様々な世代で外国文化への関心や理解が高まっている」という質問に対して、「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人の割合を示している。最新の数値は33.3%と決して高くなく、何とかこの割合を上げていくためにも、国際交流の担い手の裾野の拡大や、担い手の育成という部分に関して、委員の皆様の知恵を頂きたいと思っている。

<浜田座長>

ありがとうございます。質問の内容が変わっているということだが、コロナ禍前の状況にまだ戻っていないところもあるように感じる。

そのほかいかがか。

<佐野委員>

この資料を拝見したときに、一番気になったのが国際都市像3の「さまざまな世代で国際交流や多文化共生の意識が高まり、国際感覚をもった人が育つまち」という見出し自体である。国際感覚って何？と思った。もし言い換えるならば、今日的には、やはり世界の一員であるということに自然に了解しているような感覚ということではないかと思う。そういう意味では、この見出しの前半部分は、京都の暮らしの中でのことだけを言っている。もちろん、市のビジョンであるため、京都の中のことでも良いのだが、もう一步踏み込んで言えば、当たり前のように世界のことを自分の意識の中で考えている人が京都市民であり、京都市民であれば皆がそんな都市を目指しているんだということだと思う。

ただ、それを国際感覚という言葉で表現すること自体が極めて前時代的な印象を持った。

これはビジョンの一部なので、今から言っても仕方がないことだが、もし次のビジョンを策定する機会があれば、こういった、それ自体国際感覚がないと感じてしまう言葉の使用をやめてい

くことを考えるべきかと思う。将来のために今のうちに発言させていただいた。

そういったことを前提として、京都市がどんな事業を資料1に上げているか、またモニタリング指標においても何をもって測ろうとしているのかで、具体的にどんなものを国際感覚だと理解しておられるのかが表されていると思う。学校教育関係や上下水道局の事業等、広く日常生活に関わる事柄が挙がっているのは、今後の国際感覚の醸成につながる良い考え方ではないかと思う。一方でやはり、イベントなどの何か特別に行われることが国際感覚なんだと認識している傾向が、具体的な指標の設定に表われているのではないかと思われる。イベントが悪いわけではないが、むしろそうした特別感を取り去り、国際的なことを日常化していくことが国際化なのではないか。

<浜田座長>

ありがとうございます。今回のビジョンは何年までか？

<事務局>

おおむね10年を想定している。

<浜田座長>

おおむね10年ということであれば、まもなく次回の改正や新しいビジョンを考えていかなければいけないという中で、非常に貴重な御意見をいただいた。

そして、イベントではなく、日常生活の中で多文化、あるいは色々な世界のことに気付いてくるというのが、まさしく今日の後半で議論いただくテーマにつながる問題提起だと思うので、非常にありがたかった。

そのほかいかがか。

<チースレロヴァー委員>

京都市国際交流会館について、建物が老朽化しており、もしかしたら閉館になるかもしれないと何年前に聞いたのだが、どうなるのか。

<事務局>

施設の中長期整備計画において、令和11年度に40周年を迎えるので、老朽化対策ということで一旦閉館し大規模改修を行う計画となっているが、現時点ではその内容や時期、方法について確定しておらず、ただ単に大規模改修をするのか、もっと別のやり方があるのか、その辺りも含めて現在検討中の状況であるため、決まり次第お知らせする。

<浜田座長>

ありがとうございます。

<林委員>

国際交流会館の改修については、今おっしゃったとおり。500人以上のボランティアの方が拠点として活躍し、岡崎という場所も国際交流に非常に意味のある場所だと思っているので、是

非皆様のお声も頂き、良い形で残していただければと思う。御支援をお願いする。

<浜田座長>

ありがとうございます。字幕表示システムやカルチャープレナーについて、後半の議論に関わるような実態調査、意識調査の結果に関わること、また、国際感覚とは一体何かということ、そして実際に活動を行っていくための場づくり、場の確保ということについても御意見を頂いた。

ほかにもまだまだ御意見があるかと思うが、時間の都合もあり、議題2に進ませていただく。

2 議題2

<浜田座長>

「今期テーマについて」である。本日はテーマに係る現状把握、課題の洗い出し、また論点の整理等を行っていただき、そのうえで来年度7月又は8月頃に開催を予定している次回の審議会では課題に基づく取組の方向性について議論いただければと考えている。

本日は、2つのテーマについて、まずそれぞれ事務局から市の施策の現状、考えられる課題等を説明いただき、そのうえで委員の皆様から御意見を頂きたい。テーマとしては2つ設定しているが、どちらについても関わる人を増やしていくという共通する部分が多いため、まとめて意見の交換を行いたい。

それでは、初めに事務局から国際交流に係るテーマ「市民・民間主体の国際交流の裾野の拡大と担い手の育成」についての説明をお願いする。

<事務局>

(資料3に基づき説明)

<浜田座長>

ありがとうございます。

続いて、多文化共生に係るテーマ「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成」について、事務局から説明をお願いする。

<事務局>

(資料4に基づき説明)

<浜田座長>

ありがとうございます。それでは、ただいま説明のあった2つのテーマについて、それぞれ委員の皆様から御意見を頂きたい。

<チースレロヴァー委員>

既に同じような話が出ているが、イベントを開催するのはもちろんとても良いことだが、日常生活レベルでの、いわゆる一般市民の方の意識をちょっとずつ変える必要があるのではないかと思う。非常に大きな問題で、1つの答えはないと思う。京都は特にオーバーツーリズム等が問題

になっていて、多くの市民にとって、外国人と言え、住んでいる人と観光客の区別があまりないと思う。それで、ちょっとバスが混んでいるとか、ごみが問題になっているとか、入ってはいけないところに入ってしまうとか、そういう問題が見えやすい。

でも、実は京都に普通に外国人が住んでいて、普通に生活していて、別に問題を起こしているわけでもなく、むしろ日本、京都に興味があって来た人とか、企業の方とか大学の先生とか、そういう方が多いのではないかと思います。

だから、例えば市民しんぶんや、京都市のコミュニケーションチャンネルを使って、京都に住んでいる外国人の実態の紹介や、こういう活動している人がいますとか、こういうふう外国人の家族が生活していますとか、身近な例から少しずつ外国人が住んでいても普通ですよ、別に怖いことではないですよという意識を高める必要があるのではないかと、日々思う。

<浜田座長>

ありがとうございます。資料2の市民生活実感調査の中でも、京都に外国人の方を引きつけるような受入れの環境があるかという問いについて、「そう思う」の割合が減っている一方で、実際には観光客がこれだけ増えているので、実際にそういった環境がなくなっているわけではないと思う。恐らくオーバーツーリズムの問題で、ネガティブな気持ちを持つ人が増えていることも原因としてあるかと思う。もう少し実際に暮らしておられる方の姿が見えるような発信をという御意見を頂いた。

今日資料として配っていただいた、自治会・町内会に入りませんか、というチラシについて、これは今、どのようなところで配布をされているのか。自治会に関わっておられる方にとっては、近所にも外国人の方がいらしたなという形で意識を高めるのにも役立つかと思う。このチラシは一体どのようなルートで、どのような形で伝わっているのか。

<事務局>

当初は、各自治会にお配りして外国籍の方を勧誘する手助けになるようにということで作成していた。

<浜田座長>

今は自治会の存在をあまり御存じない方がおられるかもしれないということか。

<事務局>

そこははっきりしないが、このチラシは平成28年に作成して配布し、今も区役所に置いてはいる。ただ直接お渡しすることまではしていないので、どこまでの方が御存じかというのは正確には分からない。一定、当初には配らせていただいている。また、ホームページ等に掲載している。

<浜田座長>

ありがとうございます。日本は引越しそばの文化で、引っ越してきた人がそば等を配って自分のことを宣伝しなければいけない文化なのだが、そうではなく、新しい人が来たら周りの人が訪

ねてきて、何か困ったことはないかとサポートしてくれる文化もあるので、文化の違いもあるかと思う。こういったサポートが必要だということを意識啓発し、皆さんに知っていただくこともすごく大事なのではないかと。そういう意味でも、こういったチラシがせっかくあるので、活用していただきたい。

そのほかいかがか。

<プラー委員>

資料4の7ページに、福井県や他都市の取組について紹介されているが、そこに住んでいる外国籍市民の割合と京都市の外国籍市民の比率はちょっと違うのではないかと思う。とても良い取組をされているので、参考にできるところは採用したら良いと思うが、京都は留学生がやっぱり多い。そうすると、定住される方があまり多くなく、その人たちに自治会とか町内会に入りませんか、というのはちょっと難しいような気がする。留学生の中には、自費留学生と国費留学生があり、経済的な余裕が異なる。自費となると、勉強半分、仕事半分というような状況で、加入する余裕がないし、メリットもなければ、そもそもあるということも多分知らない人が多い。資料1に書かれている、留学生スタディ京都ネットワークのような、コンシェルジュみたいなものを、積極的に、京都市やk o k o k a（京都市国際交流会館）等で、こういう取組がありますということを醸成していくのが一番良いと思う。もしかしたら既にやっておられるかもしれないが、恐らく自治会とか町内会に対する認識を全く持っていない外国籍市民も多いし、国籍別に見てもベトナムやネパールの住民が急激に増えてきているということもあるので、より積極的に、その人たちにどうやって情報を届けるのが大事だと思う。例えば留学生だったら学校に派遣してもらったり、働いていらっしゃる方だったら企業に行っていたりしてはどうか。

まずは留学生に対して先に自治会に入ってもらおうアプローチをし、その人たちが入ってきたら、その後更に展開できるようなステップになると思う。言葉の面では、先ほどの話でもあったように、字幕表示システムの活用等で、これからは言葉の障害がどんどんクリアされていく。ただ、やはり日本の方と外国籍市民との考え方にどうしてもギャップがあったりするので、それを理解していくために、コンシェルジュのような人が必要になってくる。そういう人が中心になって、大学生等を巻き込んで交流を促すことができれば良いのではないかと。

<浜田座長>

ありがとうございます。外国人の方のコンシェルジュ的な役割を担う人に関するアイデアを頂いた。

そのほかいかがか。

<庄委員>

さきほどチースレロヴァー委員がおっしゃったように、日常レベルでの市民の意識を変えていく必要があるという点に非常に共感する。今一度この段階で、トップなりリーダーなりからの強いメッセージを発信することも必要ではないか。これまでも、京都市の国際都市ビジョンというしっかりとしたビジョンがあり、リーダーが様々な形でメッセージを発信してきたと思う。だが、データを見たり、こういう審議会での議論を聞いていたりすると、もしかしてそのメッセ

ージが不足しているのではないかと、あるいはメッセージが出ていても届いていないのではないかと
という印象を受ける。改めて、この京都というまちが多様な文化や価値観と共生するコミュニテ
ィとして、ウェルカムなんだというメッセージを、リーダーから繰り返し届いていることが分か
るまで発信していただくというのも、間接的に担い手の育成や市民の皆さんの個の意識を変えて
いくところに関わっていくのではないかと。

この審議会は、幸いなことにトップの方にメッセージを伝えることができる仕組みと考えてい
るので、市民からのみならず、トップからのメッセージ発信というところを強化していくことも
検討いただきたい。

<浜田座長>

ありがとうございます。京都市の中で、多様な価値観がいかされるように、また国際交流につ
いてもトップの方からメッセージを発していただくことが必要ではないかと。

これまで多文化共生についての意見が多かったが、国際交流についてはいかがか。

<プラー委員>

最近の日本人の大学生は4年間無事に過ごして普通に就職すれば良いということで、あまり国
際化に関心がない、海外にもあまり出たがらないという話を大学の先生から伺った。国際交流に
関しては、そこをまずどうやって巻き込んでいくのかということが一歩目だと感じる。

<浜田座長>

ありがとうございます。実は統計的には留学する学生は増えている。「国際」という名前をつ
けた学部が増えてきて、ほぼ強制的に留学しなければいけない状況も含めて統計に上がっており、
海外へ出かける人の数は増えている。

ただ、学生たちとコミュニケーションしていると、外国のことに積極的に興味があるという人
が減っている感じはしている。

一方で、例えばK-POPは、興味がない人を見つけるのが難しいぐらいなので、私たちが思
っている国際交流とは違うところで、学生の関心が広まっているのではないかと。だから、その
ところとうまくリンクしていくような形で何か手を打っていくと、少し興味が広がってくるので
はという気もする。学生だとK-POPだが、一定の年齢以上の方だと、ネットで韓国のドラマ
や映画を見たりされている方も非常に多い印象。

<プラー委員>

ドラマとかは偏った意見や作りになっているので、それは少し怖い気もする。外国籍市民が4%
というのは、全国平均からしたらちょっと多いと認識しており、せっかくこれだけたくさんの外
国籍市民がいる都市に住んでいるのに、何かもったいないような気もする。

<浜田座長>

そこを入口に何とかつなげていければ。

<プラー委員>

以前は留学生のみだったが、もっと交流があった気がする。

<大熊委員>

根本的な部分になるかもしれないが、国際交流が大事だとか、良いことだというような意味合いとしては、みんな理解していると思う。必要ないとも多分思っていないし、尋ねればほとんどの人が「あった方が良く、やった方が良く」と言う。では「実際にやりますか？」と言ったときに、頭で思っていることと実際に自分の行動に移すところが、一致していないのでは…という気がする。先ほどおっしゃっていた、ドラマや映画や音楽等のエンターテインメントの世界では、大事だからというより、見ていておもしろいから見る、かわいいから好きになる。頭で考えるよりも、感覚として良いなと思う部分が強いから興味が持たれるのだと思う。

だから、一方ではトップダウンで「国際交流が大事だ」ということをちゃんと伝えていくことも大切だが、ボトムアップで「みんながやっているから自分もやろうかな」とか、「おもしろかった、やって良かった」という知り合いや仲間からのメッセージの両方が伝わることで、もうちょっと実感に訴えかけられることができると良いのではないか。

それと、もう1つ、前半の国際交流の資料3のどんなアプローチができるかという部分で、最後のスライドに仲間づくりのサポートが挙げられているが、情報提供すれば勝手にグループや団体ができていくのかと言うと、多分そうではない。しばらくの間、寄り添ってくれる存在、伴走してくれる存在が必要だと思う。僕なりの解釈で言えば、一定の共通認識、おもしろさを感じている人たちが集まったときに、それが個人の集まりからグループになっていく。そのゼロを1にするところでは、グループ化するという意味での専門性を発揮できるグループワーカーのような伴走者が必要ではないか。たまたまそのグループの中に、ゼロを1にする視点や感覚を持つ人がいれば、その後グループとして育っていくだろうが、いなければ分裂し、固まり切らずにそのまま流れていってしまうと思う。ゼロを1にするところをサポートし、その後は皆さんで頑張りましょう…と徐々に手を引き、最後は自分で走り出していってもらうという、子どもの自転車を後ろで押すようなイメージ。そういった仕組みがあると良いのではないか。

<浜田座長>

ありがとうございます。

<林委員>

京都市国際交流会館でやっている交流ファミリーという取組がある。ホームステイではなく、留学で来られた方と一緒にイベントに参加したり食事をしたりという取組で、皆さん一度やられたら、何回も繰り返し参加される。そういう楽しみを我々もどんどん発信しないと思った。

2つ意見をお伝えしたい。1つ目は、先ほど大熊さんがおっしゃったことと共通するが、活動の仲間づくりのサポート。これは今の形ではやっぱり弱いという気がしている。行政からの発信だけでは、仲間づくりや活動になかなかつながらないので、初めはちゃんと刺激して、支えて、それから見守っていくという、サポートをもう少し手厚くしていきたい。

一例になるが姉妹都市交流も、現在市民が参画している団体は少なく、高齢化等で事務局がなかなか立ち行かないような状態である。その辺をどうやって支えていくかは非常に大きな課題で、

一定行政等が担っていかなければいけない部分だと思っている。

町内会の話が出ていたが、外国人の方に町内会に入ってもらおうという以前に、最近、町内会自体が立ち行かないような状態にある。そういう意味では、国際交流の部署と地域自治を担っている区役所等がもっと密着して対策をしていく必要がある。

それから2つ目に、資料4の2ページ目に記載されている、言葉の壁、生活習慣の壁、制度の壁の中で、やはり制度の壁というのは非常に大きい。先ほど、消防団の話为例示いただいたが、やはり制度の壁として、消防団もしかしりだが、民生委員等も外国籍の方が参画することは現状でできない。ただ、同じ国のルーツを持っている方が理解もできるし、やりやすいという部分があると思うので、先ほど資料4で御紹介いただいた福井県の取組のように、京都としても日常の相談の橋渡し役となる制度をつくり、新しい公共という形で、京都発の良いものをつくっていただきたい。

<浜田座長>

ありがとうございます。

<佐野委員>

やはり一番大切なことは普通に暮らしていけること。施策は外国籍の方に対するものがほとんどだが、実は本当に変わらなければならないのは迎える側のコミュニティである。迎える側が常に外国の方を特別に扱ってくださいという意味ではなく、一緒にいるのが普通というふうに、慣れていく必要がある。

他方、ごく普通にすっと受け入れられる方もいらっしゃると思うが、そうでない方を無理に引きずり込むこともないと思う。外国人の方を町内会に受け入れるというプロセスを見ていて興味深かったことがある。抵抗を持たれる方が多い中で、ファシリテートの役割に積極的な方がいらっしゃる、その方が周りを説得したり、一緒にやりましょうと誘ったりする役割を果たすことで、外国人の方がコミュニティの中に入っていったのを実際に見たことがある。その方にある程度発言力がないと難しい部分もあるが、何か特別なイベントを行って成果を残すということではなく、日常のなかでそうしたファシリテータになってくれる人がいるというのはとても大事だと思う。

私自身は、通算4年ほどに過ぎないが、留学生として、また職業人として、外国籍側の立場で海外に住んだ経験がある。その経験も併せて言うと、外国人と交流しましょうなどと常に言ってほしいわけではなく、普通に放っておいてもらいたいこともある。こちら仕事あるいは勉強があつて外国に行っているのも、その環境の中で集中したい。日常生活が送れる条件が整い、それが普通にできるということが一番大事である。

ただ、より積極的に地域に関わりたい、町内会や活動にも入りたいという人には入口がわかりやすく、開かれていることが大事で、それがファシリテータの役割。外国人ではないが、10数年前によそから京都に来たものとして、私もどうやって町内会に入ったら良いのか、いまだに分からない。外国人だけの問題ではない。もし積極的に町内会に入りたいという方にとって、この人に言ったら良いという連絡先が分かればハードルが低くなって、短い滞在の中でもちょっとした経験ができるのではないかと。連絡先はできれば単一ではなく、複数の選択肢があるとよいと思う。

また、やはり生活習慣などの点で分かってほしいことはもちろんあり、本人も知らなければならぬ。積極的に活動に入っていない人にも最低限伝えなければいけないことがあって、それを確実に伝えることこそが行政の役割なのだろう。もちろん、ファシリテータのような人が置かれるように推進して下さることも行政の出番なのかもしれないが。

外国人側と迎える側の両方が慣れていく、そして「普通」を目指しましょうということをお願いしたい。

<浜田座長>

ありがとうございます。地域の自治会のリーダーを市から依頼するとき、恐らく集まって研修等を行っているかと思うが、地域に新しく来たとか外国人かどうかは別として、そういう方にどうやって声掛けをするかも、恐らく話されていると思う。その中にうまく、今佐野委員から御提案のあったようなことも含まれると良いと思った。

<林委員>

戦争の反省として、自治会と行政は一定の距離を置いていることから、直接的な研修等は町内会ではしていない。ただ、中間的な立場として、昭和28年に市政協力委員制度をつくり、市民しんぶんの配布等を担っていただいている。その方々には一定の研修や話はしている。

<浜田座長>

ありがとうございます。

<林委員>

日常と非日常はかなりつながっていると思う。今回の能登地震でもインドネシアからの技能実習生が50人ぐらい避難されたが、避難所でトイレがまだ2つぐらいしかなく、物資も非常に不足しているときに、彼らが阻害されて孤立してしまったと聞いた。けれど、日常の中で町内会等できちっと住民との付き合いができていて、非日常にも支え合うことができると。

これまで、町内会の加入に何のメリットがあるかと聞かれた際、なかなか答えにくい部分もあったが、災害時にどうするかという訴えかけをしていくのも有効だと思う。

<浜田座長>

ありがとうございます。まさしく日常で協力できていないのに、災害のとき、協力できるわけがないので、日常の中でしっかりとネットワークができるようにしていくことも非常に大事。それが佐野委員もおっしゃったような、これだけは伝えなければいけない、というところにも関わってくると感じた。

そのほかいかがか。

<前田委員>

外国人に対する精神的な障壁がすごく日本人は高いと感じている。私はフランスに11年住んでいた経験があり、学生時代もパリに留学していたのだが、パリは人種のるつぼである。外国人

がいることに対して、それほど障壁がない。京都にしても日本にしても、外国人ともっと普通に交流できるような機会が増えると良いなと小さい頃からずっと思ってきた。そういった機会を私も色々つくろうと思い、今舞台芸術の活動をしている。もっとお互い知ることが大事だと思う。なので、芸術の分野は何でも良いが、知るきっかけとして芸術を使うとか、舞台芸術を中心としたイベントをやるのが、もっと簡単にできると良いなと感じている。

以前に京都市国際交流会館で何回かイベントをさせていただいたのだが、結構お客さんが来てくださる。ウクライナのイベントや、フランス人ピアニストのコンサートもやったのだが、日本人の方も、なおかつ海外の方も興味を持って来てくださる。なので、例えばコンサートやイベント後に、参加者が相互に交流できる機会をもっとつくれたら良い。また、そういったイベント等々に対して、行政の支援をいただけると、更に良いと感じている。

交流すること自体はそんなに難しいことではないと思うが、言葉や文化の障壁はあると思う。ただ、何か機会があれば交流はできると思うので、是非積極的にやっていただければ。

<浜田座長>

ありがとうございます。先ほどの国際都市ビジョンの推進に係る関連事業等の説明の中でも、文化の側面から国際交流の推進が結構されていると改めて思っていたのだが、今実際にこの分野に関わっておられる中で、もう少しこういうサポートがあると良いとか、こんなことができるのではないかなどの提案があれば、併せて伺いたい。

<前田委員>

せっかく文化庁が京都に来たので、文化庁と京都市、京都府がもっとうまく連携できると、より京都が楽しくなると感じている。文化面と、国際交流、文化芸術企画等、縦割りではなく横のつながりがどんどん推進されていけば。

<浜田座長>

ありがとうございます。
そのほかいかがか。

<リュウ委員>

先ほど皆さんが議論していた自治会について議論したい。私は2013年に日本へ来た。自治会について聞いたことはあるが、具体的にどうやってその自治会に参加することができるのかは全然分からない。例えばこのチラシには「近所の人に聞いてください」と書いてあるが、近所の人とは具体的にどんな人か。留学生の隣は、外国の留学生なので聞いても難しいと思う。日本人にとっては近所の人に聞くのは普通で、簡単に加入できるのかもしれないが、外国人としては、ちょっと難しい。

<浜田座長>

ありがとうございます。先ほど日本人でも難しいという話もあったが、留学生の方だとなおさら難しいということか。

<チースレロヴァー委員>

留学生は、無理して自治会に入る必要はないと思うし、日本に来て半年とか1年だと、あまり興味もないと思う。長期的に住んでいる方は、入るのも一つの選択肢かと。ただ、町内会というコンセプト自体が、結構日本的だと思う。海外には、国によってはあるかもしれないが、何で入った方が良いのかなど説明してあげないと、ややこしいし、やめておこう、で終わってしまう。

<浜田座長>

町内会の運営自体が、非常に日本的に行われていることもあるので、むしろ外国人の方に入っただいて、より開かれた運営が行われるようになると、双方にとって良いのではないかと。

そのほかいかがか。

<プラー委員>

仲間づくりのサポートは、すごく良いこと。日本に長く住んでいて日頃から感じているのは、友達ができれば何かあったら助けてもらえるということ。1人の外国人と1人の日本人のときはとてもフレンドリーに接してくれるような場面が多いのに、1人の外国人と行政窓口になると、冷たく感じることもある。だから友達をどうやってつくるのかというのは重要なポイントの1つだと思う。

<浜田座長>

ありがとうございます。

まだもう少し時間はあるが、言い残されたことはないか。

それでは、一旦ここまでとさせていただきます。たくさんの御意見、ありがとうございました。なかなか難しい課題だが、日本人側の意識を変えることが一番大事なのではないかという御提案をたくさん頂いた。

それからもう1つは、仲間づくりの支援が大事なのではないかということ。具体的に仲間づくりのサポートを伴走するような形でしていくような仕組みづくりについて、たくさん御提案をいただいた。無理に仲間に入れる必要はないけれども、必要なときに必要なネットワークにつながるようなサポートというのは、やはり必要だろうと。

そしてもう1つ、京都に外国人の方が増えているということ。留学生の方、それから在住の方、家族を伴って来られて京都にお住まいの方、そして、在日コリアンの方、それぞれ色々なニーズをお持ちなので、それぞれのニーズや状況に合わせてどんな形での支援が必要かを分けて考えていくことも非常に重要だという御示唆を頂いた。

本当にどうもありがとうございました。また、次回審議会に向けて、市の方でも様々な取組について考えていただきたい。

それでは、本日の議事はこれで終了とし、進行を事務局にお戻しする。

3 閉会

<事務局>

本日は長時間にわたり御議論いただきありがとうございました。

以上をもって、令和5年度第2回京都市国際交流・多文化共生審議会を終了させていただく。

本日頂いた主な御意見は、庁内で国際交流及び多文化共生に関わる部署が集まる機会がそれぞれあるため、その場で共有させていただく。また議題1について、この場でお答えできなかった御質問については、改めてお返しさせていただく。

議題2については、次回の審議会で本日の御意見を踏まえ、今後の方向性について議論いただき、来年度末に提言をまとめるという運びで進めさせていただきたい。情報発信等は、その提言を待たずともできるものがあれば、取り組んでいく。

(了)